

The Reminiscence of Exellia NG+1

グリーティング・アンド・フェアウェル

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：38500 点（新規）、42500 点（継続）
- ・ 資金：43000G（新規）、49000G（継続）
- ・ 名誉点：1000 点（新規）、1200 点（継続）
- ・ 成長回数：81 回

各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ ソード・ワールド 2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化禁止
- ・ 《防具習熟 A / 盾》《防具習熟 S / 盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・ レベル制限 5～6
- ・ 成長回数が 10 以上のときに、その成長回数の 60% 以上の偏重割り振り（極振り）禁止

動画用の参考資料

導入

《第七靈災》から 5 年後。

人々は未だに、『財団』が生産し、尖兵として送り込む魔動機——機皇帝の進軍に、
今も尚恐れを抱いていた。

旧来派はそれを起点として、『超える力』の能力者への迫害を強く行った。

現政権は、旧来派の行動を糾弾し、時には軍事的な衝突を起こしてもいた。

それを良く思わない者がひとり。

????

「ほんの少しの期間しかなかった《第七靈災》から、たった 2 ヶ月しか経っていないにもか
かわらず、この混乱具合…。

君はどう思うんだ、エクセリア」

エクセリア

「テミスか。…いや、今はアシエン・エリディブスと呼んだほうが正しいのか？」

テミス

「テミスでいいさ。そう呼んでくれたほうが、欠けゆく記憶を補える気がして」

エクセリア

「難儀なものだよな。『星の意志』になろうとして、退けられたのだから。

だけど、それが最善の道だと信じている。終わりゆく世界を、見過ごせるほど人間性は腐っていないから」

テミス

「君らしい。だけど、君はこの旅路を終えたら、どうするつもりなんだい？もう君は、これから先、世界が終わるまで『時を駆ける』ことができないのだろう？」

エクセリア

「…そうだね」

彼女がそう言うと、右手を地に置く。

右手の見え方がざらついたのを、テミスは見逃さなかった。

テミス

「…エクセリア…もう、君の身体は…」

エクセリア

「大丈夫。最後の裁定まで、持たせてみせるさ」

エクセリアの身体は、既に限界を迎えつつあった。

それをテミスが指摘するも、エクセリアは、否定をしなかった。

エクセリア

「命に限りがあるのは、どんな人であっても共通だ。喩え無際限に生きることができたとしても、どこかで人は生きをやめ、星海に還って…そして誰もいなくなる。

そうして『誰もいなくなった』世界を、『観測者』が見つけてしまったのだろう」

テミス

「…終末の災厄と、その根源である『終焉を謳うもの』か。君も含め、ゾディアークの顕現の後の真なる人の半数が、先に進まんとしたのには驚いたよ。

でも、君はもう…」

エクセリア

「ああ。この旅路を終えたら、ここまでの旅路を本に綴ろうと思う。

題は「`<ruby>準星の追想録</ruby>`レミニセンス・オブ・キューサー」とかにし
ようと考えているんだが…」

テミス

「いや。ここは敢えて…」

そう話している最中だった。

ズドン、という音と共に、そこに「それ」は現れる。

黒の剣士

「随分とアシエンに入れ込んでるじゃないか。そんなタチじゃなかっただろうに」

`<hr>`

君達は、《暗魂の暁》の大広間で落ち込んだ様子になっていた。

(※GMメモ：RP待機)

というのも、3年前…君達の面子のうちのひとりが、その病状によってこの世を去った
のだ。そして、葬儀の日。メイナは、彼女に花を手向けなかった。

メイナ

「あなた、毎度言ってたよね。

『大和魂さえあれば、こんな病気なんてどうとでもなる』と。どうとでもなっていない
じゃないか！あなたはこの世の想いを裏切った！あなたに手向ける花など、この世のどこ
にもありはしない！あなたは、自らの手で自らを殺めたのと同じだ！ちゃんとした治療を
拒んだあなただからこそ、この惨事が起こったんだ！」

彼女の遺体の前で、怒鳴りつけるように叫ぶメイナ。

そうして、メイナは葬儀場から去っていった。

また同様に、エクセリアも、リーンも、彼女に花を手向けなかった。

リーン

「あなたはどうして、ちゃんとした治療を受けなかったの。

私も、その病気に対して『真っ当な治療法がある』と言って、勧めたよね。

でもあなたは、『この程度の病気、大和魂さえあればどうとでもなる。大和魂を見せてやる』といって拒んだよね。

あなたは…旧来派の人間と変わらないよ」

リーンからは、凡そ死者に向けるものではない、侮蔑の視線を浴びせられ。

エクセリア

「お前の魂は星海に還すに能わない。

だから、お前を焼くことで、すべてに決着をつけよう」

エクセリアに至っては、顕現して彼女の遺体を地獄の火炎で葬った。

焼かれた身体は、骨すら遺さず消失したという。

故に、『暗魂の暁』のどこにも、彼女の遺影はない。エクセリアが、それを置くことを禁じたのだ。

彼女——ニコルの両親は、それに対して徹底的に抗議したと言うが…

エクセリア

「なぜ、心情でしか動かない彼奴の遺影を、残さなければならない？私は、彼奴がこの世にいていいものと思えなかった。彼奴がやった所業のすべてが、それを物語っている。

それに…彼奴は『深刻な病気を患ったら、ちゃんとした治療を受けて戦線に復帰する』という、『暗魂の暁』の規範に反した。それを『反逆者ニコル』と称さずして、なんと称せばいい」

ニコル母

「規範がどうのとか、そんなこと関係ないわよ！世紀の大罪人め！私達の娘を返して！」

ニコル父

「彼奴は彼奴なりに、己の信念を押し通そうとしただけだ！

喩え病に臥せた結果死んだのだとしても、親族として、無言であろうと、娘を引き取るのが必然だろうに！」

そんな、親としての糾弾に対して、エクセリアは意に介さぬと言わんばかりに…

エクセリア

「そうして遺体を受け取って、『反逆者の親』の烙印を押されたいのか？

あなたがたはただ、親だからなどという理由で、規範に反した冒険者の遺体を受け取らせろと言っているだけに過ぎないんだぞ。

喩えこの判断が間違っていたとしても、私は、あなた方に《反逆者の親》という烙印を押したくはない。だから、葬儀の場で私は顕現し、彼女の遺体を焼き払った。

…彼の魂は星海にさえ行けず、文字通り焼き尽くされたんだ。だから、渡すものはなにもない。それが私の答えだ」

エクセリアはそう諭したが、ニコルの両親は未だ嘔みついていたのを、君達は思い出すだろう。

…それを示すように、栈橋のほうから怒声が聞こえてくる。

<hr>

ニコル父

「ニコルを返せ、大罪人！」

ニコル母

「大罪人はどこよ！晒し首にしないと気が収まらないわ！」

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「まーたはじまったよ…。こちらとしては迷惑であると同時に、あの野郎が愛されていたってことが証明できるわけなんだけれども…」

と言って、呆れたような目で、1日間隔でやってくる下郎を見下すリーン。

彼女の目は、「いい加減諦めて欲しいんだけどなぁ」と言いたげなものだった。

事実として、ニコルの遺体は千の風になっている。葬儀の場にて、エクセリアが骨すら遺さず焼き払ったからだ。だから、ニコルの両親に返すべきものそのものがない。

また、遺品である〈フロードケーン〉と彼女の衣服は返却済だ。《暗魂の暁》はその辺の責務を果たしていると言える。

君達は、居住区を探索することもできるだろう。

病に臥せた幻術士が遺したもの

エメリーヌ

「ニコルの部屋を探索したい？

…そうね、彼のものであるであろう代物は、もう既に親族に渡しているし…。

何の成果も得られないという結末が待っていてもいいのであれば、探してみてもいいわ。

…死体漁りのようで気が乗りそうにはないけれど」

探索（スカウト観察）判定 目標値：15

成功時、ベッドの引き出しに書簡があることが分かる。

判定成功時処理

エメリーヌ

「何か見つけたの？」

（※GMメモ：RP待機）

エメリーヌ

「この書簡…間違いないわ。ニコルの遺言状よ」

ニコルの書簡

このクソツタレな世界を生きる、僕の仲間へ。

僕は軍事に命をもらっている。軍事の要素がまるでないこの世界では、きっと僕は生きていけないだろう。事実、僕はこの世界の《理》に絶望した。

かの《理》の妄言から生まれる、この世界の巡りはクソツタレだ。

僕は評価などを理由としてやることを選ぶことはしない。ということで、もう頑張ってくれ。僕は知らん

…後にも、何かしらの文章が書かれているようだが、血まみれで何を書いてあるのかわからなかった…。

エメリーヌの反応

エメリーヌ

「…なぜ血がついているのかしら」

（※GMメモ：RP待機）

メイナ

「喀血、ってやつかもね」

エメリーヌ

「喀血ねえ…。彼女は、相当マズい病気になっていたのかもしれないわね。それを、『大和魂』などという信念だけで乗り越えようとした…。もはや『反薬剤』とでも言うべき感情ね」

メイナ

「『軍事に命をもらっている』か…。確かに、彼女の父は、龍刻連邦の海軍に属する軍人だったね。そして、この世界の《理》…それはきっと、この物語を形作り、今も尚私達を操る…醜い悪鬼だろうよ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「この物語を、《理》は本格的に終わらせようとしている、ということか…。

…ニコルの慧眼に敬意を表したいところではあるが…お前はそれ以前に、真っ当な治療を受けなかったことが大罪だ。よって、この物語は、私達の手で続けるんだ」

そのとき、空間に声が伝わる。

????

「ニコル・ヘイデンを…、その魂を担う、桐ヶ谷氷龍を殺したのは他の誰でもない、お前だろう？エクセリア・アウェア」

青い、桜模様の着物を着た、銀髪赤眼の女性。

その雰囲気は、どこことなくエクセリアに似ていた。だがひとつだけ、彼女に対して言えることがあった。

——そこに、世界を滅ぼすというドス黒い意志があったことだった。

エクセリア

「その憎悪…そしてこのエーテル…なるほど、お前がこの物語を生み出し、あまつさえ、『私』という端末を生み出した訳か。

…てっきり、砕けたと思っていたのだから——神城まどか」

まどか

「私は私の意志で塵殺を遂行する。君達には、いまここで、滅んでもらうよ。

君達にはもう、未来はない。ここが、お前達の『終の禱』だよ。この世界を制する理、『創造者』たる者、クラフターの名に於いて、お前達を消去する」

悪意と憎悪に満ちた世界

君達は、よく分からない領域に飛ばされるだろう。

まどか

「ここは、創造者の籠——。お前達、未来を勝ち取ろうとする大罪人を幽する、次元の狭間」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…まどかッ！！」

まどか

「ミュトスよ…そしてハイデリンの使徒よ…。ここに、お前達が揃うのも、また定め。
お前達は、その身に刻まねばならない。創造者が犯した、罪の深さを」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「周りに仲間がいることに対する嫉妬か？まあいい。彼奴の都合で、こちらを閉じ込めるようなら、彼奴を倒して、脱出するだけだ」

コンテンツ解放：次元牢獄 クラフターズ・ルイン

次元牢獄 クラフターズ・ルイン

星を彩る者

まどか

「創造者の罪を語るには、私の誕生以前に、時を遡らなければならない」

彼女がそう言い、消え去ると、周りの石がひとつになる。

まどか

「この物語が紡がれる以前——ある少年は、『とある暗い魔法少女ものの主人公』に、『アルビノ化』の夢を見た。

だが、その代償も大きかった。やりたいことを、早々に果たしてしまい、私という存在は、ただ物語を作り、歩み続けるだけの機構へとなり果てた。私は、第3次とも言うべきその戦いで、地下世界の殺戮者によって殺された。

しかし、私は幾度となく転生した」

エクセリア

「…その一端で、私はお前の端末だと言いたいのか…！」

その時、敵が現れる。

モヤに包まれ、顔は見えないが…その姿は、メリアのようだった。

敵：デプライヴェ・アストロロジアン

君達はデプライヴェ・アストロロジアンを撃破した。

その直後、徐に石が集まり、道ができる。

エクセリア

「どうやら、進めってことらしい」

魔導の道を征く者

まどか

「幾度も転生し、魂に限界が訪れた私は、最後の生を経て、遂にその魂が砕け散り、その断片のみが受け継がれた。道程で、その物語でさえ、消え失せたが…概念的な存在になって尚、長く苦しい戦いは続いた」

再び、石がひとまとまりになる。

まどか

「しかしようやく、私の再誕に耐えうる器が現れた。

それまで、路傍の石程度に思っていた、私の魂の断片を継いだものが、ここに来てその資質を得たのだ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「路傍の石だって…？人は誰もが、生きるために戦っている。

答えろ、神城まどか。お前は这个世界のことを、なんだと思っている！？」

彼女の発言に、まどかは何も答えなかった。

それどころか…そこに、またしても、顔がモヤで覆われた影が現れた。

今度はタビットのようなが…細剣を持っている。

エクセリア

「…これは…まさか、『1周目の冒険者』を模倣しているのか！？」

敵：デブライヴェ・レッドメイジ

君達はデブライヴェ・レッドメイジを撃破した。

(※GMメモ：RP待機)

メイナ

「まだ道が続いている…。行こう」

まどかの『物語』

まどか

「砕け散った魂は、それぞれの魂に干渉し、『主人公たれ』『英雄たれ』という宿命を植え付けた。だからこそ、私の魂の断片を受け継いだ者達は、何の弊害もなく、外なる世界の概念をその身に刻むことができた」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「私が、アルテマの器…ミュトスになることができたのも、それが理由か？」

まどか

「いいや。それは、私の魂の断片によって構成されるものではない。

アイザックの、世界に対する憎悪が、お前をミュトスへと至らせただけに過ぎない。

お前は、もっと根源的な仕組みを知っているはずだろう？」

アルテマ

『どうということだ…！？』

(※GMメモ：RP待機)

そのとき、君達の眼前に、まどかが現れる。

まどか

「そう驚くこともないだろう。人とは苗床に過ぎない。

私を再誕させるための器を育むためのね。

私は、器という果実がなるのを待ち、時が来るまで眠りについた。

だが、私が眠ったことで、欠片を継いだものは私との繋がりを失った。

彼らはそれを、主に見捨てられたと錯誤し、導きを求めて彷徨った」

そのとき、石がひとまとまりになる。

そこには、二柱の神の激突が描かれていた。

(※GMメモ：RP待機)

まどか

「そして、罪を犯した。己自身を歴史の記録者とする『物語』を作るという、大罪をね」

アルテマ

『…我がミュトスに殴り倒され、対等な関係になるという路もまた…、《大罪》だというのか、貴様はア！』

(※GMメモ：RP待機)

メイナ

「人が物語を紡ぎ、己の干渉ができない歴史を罪と…！？」

エクセリア

「人の罪？それが…？」

私はともかくとして、アルテマや、今ここにいる彼らと何が違う。

まどか、貴様は…！」

道はまだ、続いているようだ。

路を遮る者

君達は、次元の狭間の最奥に辿り着いた。

そこには、漆黒の機神がいた。

エクセリア

「アレは…！？」

アルテマ

『黒い…コズミック・クェーサー・ドラゴン…！？』

(※GMメモ：RP待機)

まどか

「あれこそ、私が本来至るべきだった姿。私が器として求める、お前の姿だ。

人の罪により、私が綴り、渡ることのできなくなった物語。このままでは、この星に物語が溢れ、やがて星系ごと破裂する。

その焦燥に駆られたとき、唐突にお前が生まれた。

私はお前を、まるで人が赤子を慈しみ育むように、召喚獣を喰わせ、成長を見守ってきたのだ。

今こそ、己が役割へと還るがよい。そして器よ、私の再誕を」

(※GMメモ：RP待機)

戸惑う君達をよそに、エクセリアが前へと進む。

エクセリア

「物語の氾濫による破裂…。それが罪だって？

お前だって生き延びるために、物語を紡いできたんじゃないのか！人も同じ。自分の路を、自分で拓くために、物語を紡いできたんだ！お互い、望みは同じだったのに、なぜ手を取ろうと考えなかったんだ…！私はアルテマに、終末を退ける未来を見せたことで、手を取り合う路を拓いて見せたんだ！」

(※GMメモ：RP待機)

まどか

「私が人と？なぜ？土塊に何を求めると言うんだ。お前の言葉は、理解に苦しむ…」

アルテマ

『嘗ての我のようなことを言っているようだから言わせてもらおう…。

お前の自我は、人と同じだ…。我もまた、結局のところ、驕り高ぶっているだけで、人とさほど変わりはしなかった！』

まどか

「エクセリア・アウェア…。お前が生まれた以上、旧律の神は、人はもう、役目を終えたんだよ。遺す必要性もないだろう。

私の再誕を以て、人は滅す」

(※GMメモ：RP待機)

メイナ

「どういう意味だ…！？」

まどか

「私に背き、罪を犯す人など、私の路には無用なもの。この世界は私のもの。そこに在るものをどうしようが、私の自由ということだよ」

エクセリア

「ここは、私達の世界だ…！勝手なことをさせるか…！」

そう言って、エクセリアが顕現しようとする。

が、すんでのところでそれが中断される。

エクセリア

「なに…！？」

まどか

「私は物語の執筆者。その力を制するのは容易い」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…私達ならやれる」

まどか

「物語を持つ故に、仇為すか」

まどかがそう言うと、黒いコズミック・キューサー・ドラゴンが崩れ落ち、まどかに纏わり付く。

まどか

「心得よ。真の主の意を覆すことなど、ありはしないと」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「私達も…みんなも…。この世界で、必死にもがいている。どんなに歪で穢れていても、ここは私達が、生きてきた世界だ。私達と貴様と…どちらかしか残れないのなら…！」

エクセリアは抜刀し、宣言する。

エクセリア

「貴様が消えろ」

敵：神城まどか

フェーズ 1

まどか

「罪深き人よ、拝跪せよ」

フェーズ 2（戦闘開始から 6 ラウンド経過）

まどか

「幾ら抗おうと、お前達の犯した罪が消えることはない。

人よ、拝伏せよ」

物語に綴られた、瑕疵塗れの記録が描かれる…！

まどか

「人よ、地に伏して慚愧せよ。私は世界の理、真の主なり」

フェーズ 3（絶の軌跡・検証の章突破後）

まどか

「私の器ごときが、主に仇為し、更に罪を重ねるつもりとは…。
ならば貴様らの意志を…ここで終わらせるとしよう」

神城まどかは「クラフターズ・ルイン」の構え。

戦闘終了後

まどか

「その力…やはりお前こそ、幾星霜待ちわびた器だよ、エクセリア・アウェア」

まどかは纏っていたドス黒いエーテルを解き、エクセリアを見据える。

まどか

「…だが、主に仇為した。この大逆の罪は、捨て置けない。
今ここで、お前の…その、肥え太った自我を滅す」

消えゆく物語

君達は、唐突に地に伏したエクセリアを見て愕然とするだろう。

（※GMメモ：RP待機）

…何度呼びかけても、エクセリアの意識は戻らない。

自我を、本当に消し去ったのだろうか？エクセリアとほぼ見た目の変わらない、あの少女が？

（※GMメモ：RP待機）

やはり反応がない。

まるで、生きたまま屍になったかのように。

とにかく、呼びかけ続けよう。

「エクセリア」、と。

(※GMメモ：RP待機)

玉座にて。

心に燦る残留思念

「——ねえ、エクセリアさん。《巫女》を名乗るあなたは、誰かを救えたの？」

「その道のりで、沢山の人を不幸にしまったでしょ？」

「結局、志など何の役にも立ちはしない」

「所詮は綺麗事なの。後にも先にも、そこにあるのは積み重なった死体の山だけ」

「そう、どんなに頑張っても…報われることはないのよ」

『だからもう、無理はしなくていい』

玉座に座るエクセリアは、意志が薄弱になっているのか。

エクセリア

「そうなのかも…しれない…」

そう言って、首を下に落とす。

牢獄にて。

心に渦巻く残留思念

「お願い、誰か私を助けて！誰か私を愛して！」

「どうして…どうして手に入らないんだ！？こんなに願ってるのに！」

「人が自我を持ったが為に、己の欲望に固執する、不完全な存在となった」

「それ故自らを苦しめ、殺め、自らの欲望で世界さえ壊してしまう」

『なら、何も考えないほうが楽になる』

廊下に立つエクセリアは、意志が揺らぎ続けているのか。

エクセリア

「ああ。…そうだな…」

牢獄の路を照らす灯が消える。
その直後、ひとつだけ火が灯る。
牢が開き、そこから現れたのは…

ヴェーネス

「エクセリア！」

<hr>

景色が変わる。
最初の火の炉、その中核で。
世界を焼く己を、エクセリアは見た。
そのとき、空間に声が響く。

彼方より響く声

「これは幻よ。すぐに終わる。
あなたは、仲間のもとへ帰るのです」

エクセリア

「あなた、とは…」

彼方より響く声

「あなたとはあなたです、エクセリア」

エクセリア

「エクセリア…」

その時、懐が光る。ふと取り出してみると、それは見覚えがあるようで、ないような、
橙色のクリスタルだった。

そのクリスタルが光り、声の主を呼ぶ。

ヴェーネス

「ほら…、もう一度、呼んで下さい」

エクセリア

「エクセリア——、そうだ…私は——」

ヴェーネス

「これでもう、迷わない」

ヴェーネスの手を取り、エクセリアは吼える。

エクセリア

「私は、エクセリア・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウエアだ…！」

その直後、空中にまどかが現れる。

エクセリア

「面妖な幻影を見せてくれたもんだな、神城まどか。…こういう形の幻影は、アルテマの時以来か…」

まどか

「ミュトス…。ここまでしても、自我を消すことができないか…。しかし、なぜ、ハイデリンがここに…。外界から干渉することなど、人の身にできるはずが…。

…いや、元より《ここ》にあったのか。ミュトスの自我に、ハイデリンの像が刻まれ、思念によって、その実体を得たとでも…？

思念が、人を創造…？人の思念…想いとは、これほどまでの力を…」

エクセリア

「ここから出させてもらうよ」

そう言って、ヴェーネスとエクセリアは『顕現』する。

まどか

「むっ！？」

そうして現れたのは、宙準星の竜…その本来の形。

エクセリア

『この炎で焼き尽くす…！』

コズミック・キューサー・リズンは、中程度の大きさの火球をぶつけた。

まどか

「これは、ただの進化ではない…。

まさか、お前は高次元生命体に…真化しようとしていると…！？」

崩れゆく創造者の籠。君達が見守る中、徐に立ち上がったエクセリアは、気怠げな声を上げながら君達に向き直る。

エクセリア

「タチの悪い夢を見させられた。…まどかの野郎、後でけじめをつけさせてもらう」

そう言って、憤怒の感情を隠さず言葉を紡ぐ。

まどか

「人が高次元生命体に…偽りの神になろうというか…！進化の道を外れ、私と肩を並べようなど…！これ以上、お前の身伧を許しはしない。

——ほおら、外には君達を断罪せんとする悪鬼がやってきているぞ？

そいつを倒さない場合、世界は祝福無き者に奪われるだろうよ。その間に、私は本来の力を蘇らせよう。

そして、お前達に耐え難き絶望を与え、文字通り肉の器にしてあげよう。

創造主の力、思い知れ」

その言葉の後に、君達は《暗魂の暁》へと強制転移させられた。

アルテマの、咄嗟の判断だった。

帰還

君達は、《暗魂の暁》でことのあらましをエメリーヌに伝えることになる。

エメリーヌ

「この世界を塵殺すると宣言した、神城まどか…やはり、私達の世界は終わりを迎えつつあるのね」

スチュアート

「神紀文明時代より、世界を抹消するために暗躍してきたという、『神城』の一族…、その最後の生き残りなのだろうか？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「奴は…この世界の《理》だ。この世界に物語を築き上げた張本人だ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「この世界に、異界の仕組みを組み込み、繋ぎ合わせ…人々に不自由と新たな可能性を齎している。彼女の目的は…彼女自身の再誕と、それによるラクシアの破壊だ」

「私を器に、彼女はこの世界に再誕し…そして、その力で、世界を破壊し、己にとって都合のいい世界へ作り替えるつもりなのだろう。

彼女に逆らう意志が芽生えた者を、存在抹消という形で消し去り…『己にとって、都合のいい、あらゆる人々が創造主の操り人形になる世界』を望んでいる…と思う」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「厄介なのは、奴のもつ力、《ディバイン・ジャッジメント》だ。アレは、ただ彼女の力を見抜いただけでは、その子細を把握することはままならない。私は奴の力によって、奴の思い通りに動かされた」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「一言で言えば…事象の書き換え。たとえば、『私が攻撃を命中させた』という真実があったとしよう。奴は、私の描き出した真実を、奴の望む『すべての理は我が意のままに流れる』と言う風に書き換える。その結果、こちらの攻撃は当たらず、あちらの攻撃は必ず当たる」

「また、『すべての理は我が意のままに流れる』というその権能を活かしてか…奴はきっと、龍姫公に『早急なヴァルマーレとの開戦』をするようにせがんだ。

私達の存在を、手っ取り早く抹消する方法としては、ヴァルマーレの圧倒的な軍事力を用いての攻略が、一番手っ取り早かったのだろうよ」

(※GMメモ：RP待機)

エメリーヌ

「じゃあ、あなたは…彼女に利用されていたというの!？」

エクセリア

「そういうことなのだろうな。

そして、奴は『創造主』の写し身、すなわちアバターに過ぎない。奴を倒しても、『創造主』がこの惑星を破壊する快感に味を占め続けている限り…奴は世界を創っては理不尽に滅ぼすのをやめないのだろう。

そして、神城まどかは言っていた。『創造主』の名前をな」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「『ホクトクラフト』。これが、創造主の名前なのだろう。

そして今も、私を、エメリーヌを、リーンを、君達でさえ、操り人形のように操作し続けている。『ホクトクラフト』は不滅だ、この物語を作り続ける責務があるからだ」

「全力でお灸を据えることができて、奴はそんなこと知らんぷりで私達を破滅に追いやるだろうよ。それが奴の歓びで、『全滅を至高とする』奴の癖でもある。アイザックが途轍もない終末思想に染まったのも、恐らく奴の口車に乗せられたからなのだろう」

「奴を退けたとしても、奴の支配からは逃れられない」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・ 本当に支配からは逃げられないのか？
- ・ もしそいつがいるとするなら、一体どうやって倒せばいい？

エクセリア

「それは…」

????

「俺に抗ってみせればいいじゃないか」

そこに現れたのは、あからさまに侮蔑できる外見をした、一人の男だった。

だが何故だろう、ここには守りの剣を置いているのに、彼からは穢れを感じる。

エクセリア

「やっとお出ましか。ホクトクラフト」

ホクトクラフト

「端末風情が、仲間を集めて抗っているのを見て、ひどく滑稽でね。いくら仲間を集めてまどかに挑もうが、結局巡る結末は変わらない」

(※GMメモ：RP待機)

ホクトクラフト

「俺が、お前達が死ぬ、と言う未来を書き記しているからだよ。

既に、物語の最終局面までは書き終えた。俺を真っ向から否定し、討ち取った場合…、この世界を観測する者がいなくなることになるわけだ。

つまり、お前達が俺に挑もうが、『この世界は終わり』という結末に変化はない。

無論、最善は尽くす。お前達が飽きない程度に、刺激という刺激を与えてやるとも。

せいぜい、その滑稽な立ち回りを、世界の晒し者として晒し続けることだな」

そう言って、『すべての元凶』は消え失せた。

創造者にとって、次元の壁などただの仕切りに過ぎないのだろう。彼の理不尽な物語の結果、世界が滅ぼうが、滅ばずに『永劫に続く辛苦』を味わい続けようが…彼は、それを滑稽な喜劇として処理してしまうのだろう。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…私が生み出された意味…それは、奴に、『私達の絶望』という味を提供するためだけだった、か。これから先、きっと奴の刺客が送り込まれ続けるのだろう。彼奴にとって、『神城まどか』も端末に過ぎないんだ。この世界を滅ぼし、その滅びの様を喜劇として晒し首にするための。

…最後の質問だ。こんな醜く、穢れと殺意、憎悪に満ちあふれた世界で…君達は、まだ前へと歩み続けるかい？」

PC への選択肢

- ・ 勿論だ！
- ・ 「旅は道連れ、世は情け」、ってな

エクセリア

「…君達の覚悟は受け取った。——コイオス山に、『黒の剣士』が待っているらしい。
だが…まずは休むんだ。創造者の籠に閉じ込められて、きっと疲労も溜まっているのだ
ろう。君達の準備ができたのならば、また声をかけてほしい」

報酬

経験点

- ・ 基本：12500 点

資金

- ・ 基本：3900G

報酬経験点

- ・ 基本：200 点

成長回数

- ・ 基本：19 回

アイテム報酬

- ・ 〈楔石の欠片〉：12 個
- ・ 〈楔石の大欠片〉：6 個